# 「誤用」から日本語学習の「成果」をはかる試み：
# 中級学習者による「旅」の作文を用いて

Interpreting the 'Development' of Intermediate Japanese Learners
through 'Error Analysis' on Essays Regarding Travel

日本語教育における誤用研究の重要性についてはこれまで度々議論され、その有用性が認められている（市川 2012；大塚 2010；森本 2016）。その研究内容も、日本語学習者集団の一回の作文における誤用を全面的に分析したものや、特定の言語項目や文法表現に焦点を当てたもの、また、作文指導に関して提案したものなど多岐にわたっている。しかしながら、「誤用」を言語習得の一過程ととらえ、「誤用」から学習の「成果」を探ろうとする研究例は数少ない。そこで、本研究では、日本語学習を始める前と、一年に及ぶ学習の後に書かれた作文を分析評価し、両者に見られる誤用を比較検討することによって、学習の成果をはかることを試みた。

筆者らが所属する日本語学科では教育内容の質の向上を目指し、2010 年秋より Entrance Exam (秋学期)、Exit Exam（春学期)を実施しており、その一部として、全学生に作文の試験を課している。本研究にあっては、このうち中級学習者によって書かれた「旅」の作文 200 本(Entrance、Exit 各 100 本ずつ)及び学習者へのアンケート調査を分析資料として用いるものとした。

こうして 200 本に及ぶ作文を分析した結果、以下のことが明らかになった。

（１）Entrance の作文 100 本、及び Exit の作文 100 本における誤用総数は、各々、1390、1386 で、両者における誤りはほぼ同数であった。

（２）Entrance と Exit の作文一本あたりの平均文字数は、それぞれ 216 字、212 字で、作文の分量に関しては大差はなかったが、Exit の方が漢字の使用量が多く、従って、そこに含まれる情報量は自ずと増した。しかし、漢字を使用しようとしたがために、誤用も頻発し、Entrance における漢字誤用率は 10％であったのに対し、Exit では 17％となり、7％の上昇を招いた。

（３）Entrance、Exit ともに誤用が顕著だった項目は助詞で、それぞれ、全体の 18％、17％を占めた。殊に Entrance においては、場所の後に用いる「に」と「で」において誤用が目立ったが、Exit にあってはこのような誤用は減少し、代わって、従属節や名詞修飾構文の使用に起因する「は」と「が」の誤用の増加が認められた。

（４）Exit で最も誤りが多かったのは語彙(18％)であり、Entrance(12％)と比較すると、6％増であった。とりわけ Entrance では、「します、あります、です」といった和語の使い分けが定着していないことから来る誤りが顕著であったが、Exit においては「人生」と「生活」、「出席する」と「参加する」など意味が似ている漢語の使用に誤りが多く見受けられた。

（５）Entrance では活用の誤り(13％)が際立ったが、Exit では減少する傾向にあった(8％)。特に Entrance では、「イ形容詞」並びに動詞の過去形、加えて、動詞の「て形」に誤りが集中したが、Exit においてはそのような誤りは減少し、これらの活用についてはかなり定着したことがうかがえた。

（６）春学期に「である体」が導入されたため、Exit においては「です・ます」体と「である」体の混在が見られたほか、「いいである」「おもしろいである」といった「イ形容詞」に関わる誤用が 20 例(2％)あった。これは Entrance においては全く見られなかった誤用である。

最後に、本発表では上述の誤りがいかなる環境下で頻繁に起こるのか、またなぜ起こるのかについて学習の成果という観点から考察を加える。また、アンケート調査の結果をも踏まえて、限られた時間内で最大の学習成果を生み出すためには、本研究内容をどのような形で教材作りや教授法に活かしていったらよいのかについても言及する。